
命を守れ

KMY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命を守れ

【Nコード】
N4404B

【作者名】
KMY

【あらすじ】
零時治は超エリート中学校の中学生。ある日給食室からウンチのにおいがするから近づいて見ると、「見たな金払え」と給食のおばさんに怒鳴りつけられることから治の人生は一変。「居候」のあらすじとして下書きしたもので、せっかく書いたので公開します。

1 (前書き)

どこまで我慢して読めるか競争に使えます。

零時治は超エリート中学校の中学生。ある日給食室からウンチのにおいがするから近づいて見ると、「見たな金払え」と給食のおばさんに怒鳴りつけられることから治の人生は一変。ナイフを突き出してお金を請求するおばさんを振り切つてタクシーに乗り込むも、運転手に「あんたジェラポリエの踊りをしなさい」と宗教的な匂い。慌ててタクシーを飛び降りると今度はバーを見つけて入る。しかし、そのバーでも「この連続殺人事件の真犯人は、あなただ！」と入店早々言われ、他の客にはじろじろ見られ、治は屋島へ敗走する。

屋島で再起の機会を伺っている治の後ろから突然檸檬が姿を表した。治は「離れる」と言うも檸檬に「ピロツクスはオリツクスの敵だから。」と言われる。命の危険を感じた治はそこから逃げ出すも、今度は葛飾先生と話しているハルスの姿を発見。ハルスに「おもむろに死になさい」と原因不明の暴言を言われ、ベーパーナイフを取り出して身を守るも葛飾先生に破られる。賠償を請求すると「汝は何時に寝るのかね。」と寒いだじゃれを言われ毛布に潜り込めば風馬漣に「これがないとあんた生きてるから。」とナイフを突きつけられ生死の大往生。

風馬漣似の女性からやつとの思いで逃れてきた治は、アメリカのラスベカスに迷い込む。そこで徳川家康似の男性からオゼ口を要求され「オゼ口を日本で作られた遊びと認めないと君の首はないよ」と言われ渋々オゼ口を打つがそこに家光似の男性が「参勤交代の欠点を述べよ」とオゼ口の盤を割る。真っ青になった治はその場を離れるが、そこは臨海ではないのに臨界の世界で、砂漠の海に潜りこむもやはり死ねず。命からから日本に戻るも、「君、誰。」とドラえもん似の人形に声をかけられその場を離れるも、「逮捕する!」

と警官に手錠をはめられ、治は刑務所へ。

零時治は悩んでいた。看守に虐待をされたのである。毎日のように看守に虐待をされる。そして、ある日プリミル似の男性が刑務所にやってきて、看守におしっこをかける。それ以来看守は治に優しくするようになるが、命の危険を感じた治は自殺を図り、食べ物に枯れ葉を混ぜて食べるも死ねず。そりゃそうだよ枯れ葉自体を食べないからだよ、と悪魔の声がして命の危険を感じた治は刑務所から脱出するも、路傍でぶつかった男性に「ひびろむを唱えよ。」と言われ、治は無理矢理人間史最大の人間滅亡の危機を阻止するヒーローにされる。

1 (後書き)

これは、「さよなら絶望先生」の「前巻のあらすじ」をモチーフにしたものです。

これから書いて行きます。

更新周期は極端に遅いのですが、宜しく願います。

さよなら絶望先生の登場人物とかは出てこないのですが、せっかくファンフィクションで登録したからにはある程度は出して行きたいと思います。

この小説は、

「どこまで我慢して読めるか競争」に使えます。

とんとん使って、読むのを我慢できなくなったら罰ゲームとか。とにかく誰も一目見ただけで読みたくなる、

そんな工夫がいっぱいです。(遅

行けー 退けー 気が付いたら治は、ヒーローと言う名目で、戦争へ狩り出された兵士となっていた。と、敵の戦車が目の前に。命の危険を感じた治は、そこから逃げ出し日本に戻る。しかし日本に戻ってから治は周りの皆に奇異の目で見られる。「何故ですか。」治が理由を尋ねると、嘉田知事似の女性は答えた。「新幹線なんかに乗るからだよ。」命の危険を感じた治はその場を離れ、バーに入る。バーでは入るなり「ここではツンばかりのツンテレカフェなんです。」と、赤木杏似の女性に言われ、命の危険を感じた治はその場を去るも、さっきの給食のおばさんが今度はたくさん集まり「金払え、金払え。」の大合唱。

「フランソワスって何？」この一言で治は目を覚ます。立ち上がると、治の目の前に、木津千里似の女性がいた。「あんたでいいわ。」木津千里似の女性が言い、命の危険を感じた治はその場を去る。しかし今度は「ムラサギババアじゃ、ムラサギババアじゃ、」と叫びながら紫の着物を着たおばさんに追いかけられる。すると道中で飴を嘗めている男の子に出会う。「ポマードって言えば助かるよ。」命の危険を感じた治はその男の子から飴を取り上げおばあさんに投げ、逃げる。やっとのことで逃げた先は高校。高校に入りなり中学生の制服をしているくせに教師と間違えられ、無理やり教壇に立たされる。

治は多数の生徒を目の前にして困惑していた。高校の勉強なんて知らないよ。そうすると、小森霧似の女性が教室に入り、「免許よこせ。」と言われる。命の危険を感じた治は、窓から教室を出逃走する。追って来た生徒達より速く走り、逃げ切ると、今度は皇居前広場で、意味不明の踊りをしている集団にぶつかる。「何の踊りを

しているのですか。」治が尋ねると、一人は答えた。「ジェラポリエの踊りをしているのだよ。」命の危険を感じた治は逃げようとするが、ジェラポリエと名づけられた奇異な踊りで治は捕まり、そこで常月まとい似の女性に言われる。「キスしないと殺すよ。」

治は困惑していた。常月まとい似の女性とキスしないと殺される。治は無理やりキスしてやったが、今度はほつぺたを叩かれ「勝手にキスしたな。」と見上げると木津千里似の女性。命の危険を感じた治はその場からはなれるも、一個の大きな石にぶつかる。その石には「1952年5月1日はとっても楽しい日」と書かれていた。皇居前公園とはさほど遠くない。命の危険を感じた治は駆け出しその場から飛び出すも、いきなり空から降って来た日めくりは「1952年5月1日」。命の危険を感じた治はその場を去ろうとするが、いきなり目の前からたくさんの人々がこっちに向かっていているのに気付いた。

2 (後書き)

分かりにくいです。最高に分かりにくいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4404b/>

命を守れ

2010年10月20日19時03分発行